

# 南城市の沖縄戦

資料編

南城市教育委員会







南城市長

瑞慶覧 長敏

このたびの『南城市の沖繩戦 資料編』発刊にあたりごあいさつ申し上げます。

南城市においては、合併前の旧町村時代から住民に一番身近な行政機関として、住民が生きてきた軌跡を丹念に調査・研究し、それぞれ町・村史として記録を残してきました。沖繩戦に関しても各町村によって成果が残っております。

今年で戦後七五年となります。戦争体験者は減少し、戦争の記憶の風化も危惧されています。そのような状況で、私たち市民の身近な存在である地方自治体が沖繩戦に関する記録を残していくことは、これからも変わらず重大な責務であると感じています。

私が生まれたとき、沖繩には米軍基地が当たり前に在りました。今なお県内には、多くの米軍基地が存在し、名護市辺野古には新たな基地が建設されようとしています。現在の沖繩にお

ける基地、米軍について理解しようとするとき、私たち沖縄県民が戦争についてどのような歴史を歩んできたかを振り返ることとはとても重要であり、避けて通ることはできません。その意味で本書は、地方自治体がローカルな視点から沖繩戦について記述したという面で、理解の手助けになるかと思われれます。

今日私たちが享受している平和を次の世代に継承していくには、私たちひとりひとりがかつての戦争について学び、伝えていく必要があります。市が掲げる将来像「海と緑と光あふれる南城市」を子や孫たちに残すためにも、私たちの絶え間ない努力が求められているのです。本書が後世に伝えていく役割の一端を担うものとして、国民共有の財産となることを願うものがあります。

本書は、編集委員や専門委員の皆様のご尽力や、関係機関のご協力、何と云いましても、聞き取り調査や資料提供に協力して頂いた皆様のお陰で完成をするに至っております。ご支援いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

二〇二〇年（令和二）三月



## 教育現場での活用に努める



南城市教育長 上原 廣子

『南城市の沖縄戦 資料編』の刊行にあたりごあいさつ申し上げます。委員会の皆様や大勢のご協力いただいた方々のお陰を持ちまして、長年の歳月をかけた本書を刊行するに至りましたことに、厚く感謝申し上げます。

合併前の旧四町村においては、知念村『知念村史 第三巻 戦争体験記』、大里村『私の戦争体験記』、佐敷町『佐敷町史 四 戦争』、玉城村『玉城村史 第六巻 戦時記録編』で、沖縄戦に関する記録をまとめています。その後、二〇〇六年の合併を契機として、新たに「南城市史」としての編集基本計画、刊行計画を策定致しました。そのなかで、戦争（沖縄戦）に関しても四町村を一体として、新たに構成し直すこととなり、委員会の皆様と事務局で新たな資料も発掘しながら調査研究を進めて参りました。

教育現場では、長らく沖縄戦を題材として子どもたちの平和

学習を行ってきました。しかし、年々戦争体験者の高齢化や減少で、子どもたちが沖縄戦についての証言に直接触れる機会も減りつつあります。学校でもどのようなように沖縄戦の教訓を伝えればよいか、試行錯誤しているところです。

そのような状況にあつて、私たち教育行政には、これからも調査を続け、悲惨な沖縄戦の記録を伝えていく使命があります。さらに、その成果を教育現場や市民へ還元し、活かしていく取組みも大切です。そうすることで、子どもたちが時代を冷静に捉える感性を養い、この国を正しい方向へ導く力を育てることも私たちの役目です。

市においてはこれからも調査や教育への普及を継続し、本書が、南城市史における沖縄戦研究の新たなきっかけとなるよう努めて参ります。

紙幅や編集の関係上、証言を頂いた全ての方のお話を掲載することができなかつたことは大変心苦しいですが、それらは今後、別の形でご紹介していくことができればと考えております。ご協力頂いた証言者や資料をご提供頂いた方々、ご家族の皆さまに深く感謝申し上げます。

二〇二〇年（令和二）三月



## 本書を読むにあたって

『南城市の沖縄戦 資料編』

専門委員会 委員長

吉浜 忍

沖縄戦から七五年。体験者の減少によって沖縄戦の「記憶」が薄れつつありますが、「記憶」は完全に消えているわけではありません。そうした中、「記憶」を記録し、加えて戦争の時代に記録された資料を編み、歴史資料として未来に残すことは大切なことであります。

本書は、『南城市の沖縄戦 資料編』として発刊しました。本書には、南城市関連の資料として明治期の「海軍省文書」、昭和初期の「陸軍省文書」「玉城村婦人会資料」、沖縄戦の「陣中日誌」、沖縄戦直後の『知念市誌』、これに加えて新たに発掘・収集した資料、さらに市町村史では先駆的な試みとなる、米軍が知念半島の戦闘を記録した資料も収録しました。本書は、これらの第一次資料を基本に、その時代を経験した市民の証言を重ねて構成しました。

本書の中心は沖縄戦ですが、沖縄戦を理解するために、明治・

大正・昭和初期も範囲に入れました。その理由の一つとして、南城市には、他市町村と違って明治期に海軍の施設が佐敷に建設され、中城湾が海軍艦船の寄港地になり、昭和十六年には沖縄で最初に外敵に備える陸軍部隊が与那原に常駐したことにあります。もう一つは、戦争を遂行するためには戦時体制の構築が前提で、そのなかで戦争に協力した学校や婦人会・青年会に注目しました。

『資料編』のため、文字が多く、少々堅い内容ではありますが、旧字体を新字体に改め、写真も多用し、可能な限り読みやすくなるよう編集しました。さらに、テーマごとに資料の理解の道案内として解題・解説が書かれています。

それでは、本書の内容を各章ごとに、簡単に紹介します。第一章の「沖縄戦前の軍事」では、一八九五年に佐敷村の津波古・新里に建設された「中城湾需品支庫」の施設や村との関係（火事で焼失した小学校の仮校舎使用など）、さらに一九四一年に配備された「中城湾臨時要塞部隊」の実態、また南城市出身の軍人の徴兵・出征・村葬や忠魂碑、および戦争遂行の役割を果たした婦人会や青年団の活動を描いています。

第二章「教育」では、紀元二六〇〇年祭の取り組み、国民学校での教育内容、子どもたちの戦時動員、軍隊の校舎利用、皇民化教育の象徴である御真影（天皇・皇后の写真）を納めた奉安殿を描いています。

第三章「疎開」では、佐敷、玉城、大里第一国民学校の学童疎開の実態を「垣花資料」や疎開学童の回顧録などで、また一般疎開は「渡名喜元秀日記」、疎開先の熊本県で新たに発掘した「田底村政資料（疎開ニ関スル書類）」で内容を深めていきます。さらに台湾疎開ややんばる疎開の実態も描いています。

第四章「南城市に配備された日本軍」では、玉城村に配備された独立歩兵第十五大隊や知念半島に配備された独立混成第四十四旅団第十五連隊の「陣中日誌」の中から、防諜、ハンセン病患者、食糧の供出、軍作業への動員、徴用、防衛隊や青年学校生徒の召集、女子青年を救護班に編成など、軍隊と住民の関係が分かる部分を掲載しています。さらに、一九四四年十二月十一日に稲嶺駅付近で起きた列車爆発事故や慰安所の設置、沖縄戦前夜の知念半島に配備された日本軍の配備地図も加えました。

第五章「根こそぎ戦場動員」では、南城市出身の防衛隊や男女学徒隊、軍属および義勇隊の強制動員や戦場での実態を描いています。

第六章「戦場となった知念半島」の「戦場をさ迷う住民」では、大里村・佐敷村・知念村・玉城村のそれぞれの戦時体制、日本軍との関係、村内避難での戦場体験、収容所からの帰村を描き、加えて現存する戦跡をマップ化することで平和学習などで活用できるようにしました。さらに日本軍資料（史実資料や

電報）や米軍史料（米第七師団が鹵獲した「重砲兵第七連隊防衛計画」、米海軍の「作戦報告書」、米第七師団「作戦報告書」）で知念半島の戦闘の様子を描いています。

第七章「知念半島の収容所と知念市」では、米軍史料より知念半島には六月四日に屋比久、五日に百名で収容所が開設されたことや、七月十一日～八月十八日にかけて知念半島の収容所から六千余人が北部の収容所に移動したこと、また本島には十二の市が置かれ、その中で知念市が九月に誕生したことを記しています。この知念市の「行政記録」である『知念市誌』は、十二の市のなかでは唯一残っている記録であることから全文掲載しました。『知念市誌』には、困難な状況の中での家屋の建設、食糧増産、学校建設など、戦後復興の第一歩となる地域の人々の息吹が記されています。

本書は、南城市の沖縄戦の実相を、資料や証言を通して読み取れるように編集しました。本書が市民のみなさんの地域理解の一助となれば幸いです。

二〇二〇年（令和二）三月

# 目次

ごあいさつ	南城市長 瑞慶覧 長敏	3
教育現場での活用に努める	南城市教育長 上原 廣子	4
本書を読むにあたって「南城市の沖縄戦 資料編」	専門委員会委員長 吉浜 忍	5
目次		7
凡例		10
<b>第一章 沖縄戦前の軍事</b>		13
<b>第一節 中城湾需品支庫</b>		14
中城湾需品支庫の建設／酒造会社に無償貸し付け／佐敷村への払い下げ／中城湾需品支庫のその後		
<b>第二節 中城湾臨時要塞</b>		40
中城湾臨時要塞部隊の編成／中城湾臨時要塞の建設／部隊配備／沖縄戦と中城湾臨時要塞部隊		
<b>第三節 出征軍人と戦死</b>		55
徴兵検査と出征／軍人の戦場体験／「名誉の戦死」と		
<b>第四節 銃後の村民</b>		90
―日中戦争前後から沖縄戦までの村民生活―		
各種団体の活動／国家総動員体制下の住民生活		
<b>第二章 教育</b>		115
<b>第一節 皇民化教育・軍国主義教育</b>		116
戦前の南城市内の小学校／昭和十五年以前―戦時下の教育（皇民化教育・軍国主義教育）―／昭和十六年以降―国民学校のはじまりと戦争動員の激化―		
<b>第二節 奉安殿</b>		144
奉安殿とは／南城市内の小学校にあった奉安殿／戦中の御真影と終戦後の奉安殿		
<b>第三章 疎開</b>		153
<b>第一節 学童疎開と一般疎開</b>		154
県外と台湾への疎開／沖縄への引き揚げ／学童疎開／県外一般疎開／台湾疎開		
<b>第二節 村葬／国外軍人戦死者マップ／忠魂碑</b>		

第二節 やんばる疎開……………217

やんばるへの疎開計画／南城市の割り当て疎開地と疎開者たちのその後／金武・並里への大空襲で亡くなった疎開民／やんばる疎開座談会の記録(玉城村仲村渠)

第四章 南城市に配備された日本軍……………233

日本軍史料の価値と掲載の意義……………234

第一節 独立歩兵第十五大隊……………236

独立歩兵第十五大隊／独立歩兵第十五大隊本部／第一中隊(江戸隊)／第二中隊(伊藤隊)／第三中隊(松島隊)／第四中隊(松田隊)／第五中隊(天倉隊)

第二節 独立混成第十五連隊……………386

独立混成第十五連隊／独立混成第十五連隊本部

第三節 列車爆発……………410

列車爆発／事故処理／軍の不祥事

第四節 慰安所・「慰安婦」……………419

南城市域の慰安所・「慰安婦」／裴奉奇<sup>ペガシキ</sup>―沖繩に取り残された元「慰安婦」

第五節 沖繩戦前夜の日本軍配置図……………432

第五章 根こそぎ戦場動員……………435

第一節 防衛隊……………436

防衛隊とは／南城市域の防衛隊／「陣中日誌」における防衛隊の記述／防衛隊の様子―海上挺身第二十八戦隊勤務第二小隊の陣中日誌から―

第二節 学徒隊……………449

村のエリートだった学徒たち／戦時体制下の学徒たち／沖繩戦前夜の学徒たち／戦時下の学徒たち／南城市出身の学徒たちの沖繩戦体験

第三節 軍属・義勇隊……………469

軍属・準軍属・義勇隊／「軍属」の人々に関する資料／「軍属」の人々の体験―「第十七号第二種『軍属に関する書類綴』から―

第六章 戦場となった知念半島……………493

第一節 戦場をさ迷う住民……………494

大里村／佐敷村／知念村／玉城村／南城市内の戦争遺跡

第二節 日本軍史料にみる知念半島の戦闘……………584

米軍上陸前の空襲・艦砲射撃／米軍上陸と陽動作戦／



知念半島の防衛と戦闘開始／総攻撃と逆上陸／雨乞森の戦闘／敗走

／徳元八一の「避難記」

第三節 米軍史料にみる知念半島の戦闘 …… 597

■ 南城市内の慰霊碑(塔) …… 725

知念半島の日本軍に関する情報収集活動／知念半島への陽動作戦と艦砲射撃／米軍の知念半島侵攻・大里村大城の攻防

■ 「平和の礎」戦没者名簿の空間分布復元 …… 733

第四節 米軍の戦闘図 …… 628

『沖縄―最後の戦闘』の戦闘地図／「グリッドマップ」／一九四五年六月一日から三日までの戦闘

南城市の沖縄戦 年表 …… 743

掲載資料一覧 …… 764

第七章 知念半島の収容所と知念市 …… 639

執筆者一覧 …… 765

第一節 知念半島に開設された収容所 …… 640

知念半島への収容所開設／収容所での暮らし／やんばるへの立退き／知念市の誕生／軍政地区の設定と変更／知念市の廃止と戦後の村政のはじまり

協力者および協力機関一覧 …… 765

『南城市の沖縄戦 資料編』専門委員会／事務局 …… 766

編集後記 …… 768

第二節 百名収容所 …… 663

避難民の受け入れと検問／百名収容所での暮らし／百名収容所に開設された施設

第三節 『知念市誌』にみる知念市 …… 669

『知念市誌』とは／『知念市誌』が伝える復興への軌跡

# 凡例

- 1 本書は『南城市の沖繩戦 資料編』である。
- 2 本書では、日本軍史料、米軍史料、国や県、琉球政府及びその前身組織、その他自治体の公文書、新聞記事、写真、証言、個人の手記などを掲載している。本書における「資料」とはこれらを総称するものである。
- 3 本書における日本軍史料とは、防衛省防衛研究所が所蔵する、日本軍により記録、作成された文書群のことをいう。
- 4 本書における米軍史料とは、米国立公文書館、国立国会図書館（日本）より収集された、沖繩戦に関して米軍により記録、作成された文書群のことをいう。
- 5 本書に収録した資料は、明治後期からの日本軍に関するものも含むが、本書の主題は沖繩戦に関連するものであり、読者へ伝わりやすくするために「沖繩戦」と題した。
- 6 資料の種類は「資料」（書籍の引用、新聞記事、手記等）、「写真」、「図」、「表」に分類し、資料番号を付した。資料番号は各資料分類の節ごとの通し番号とした。また、巻末にそれぞれの掲載資料一覧を設けた。
- 7 本文中での資料の引用については、原則として次のように色分けした枠で資料の種類を区別した。各節で解説本文の後に資料をまとめて掲載している場合には枠を省略した。  
書籍や文書などの引用……緑  
新聞記事……青  
証言……橙
- 8 写真、図のキャプション中には所蔵・提供元を括弧内に示した。その

9 他は巻末の掲載資料一覧に記した。資料には次の編集を行った。

- (1) 仮名表記は原史料のとおりとしたが、変体仮名は現用字体に改めた。歴史的仮名遣いの「ゐ」「ゑ」はそれぞれ「い」「え」に改めた。
- (2) 旧漢字、異体字、大字、合字は常用字体に改めた。ただし、人名や固有名詞などについてはその限りではない。
- (3) 基本的に誤字、脱字は原史料のとおりとし、行間に「ママ」を付したが、日本軍史料については史料の性格上煩雑になるため「ママ」を付していないものもある。また第一章第三節の個人の体験記においては、明らかな誤植と思われるものに限り修正した。
- (4) 原史料で判読できないものは■と表記した。推定できる文字は記入し、右隣の行間に「カ」を付した。
- (5) 見え消しは明らかな誤植や書き損じを除き、原則として原史料のとおりとし、長線で消してその後に続けて訂正字を入れた。
- (6) 資料の内容によって、住所・人名などの個人情報に関する箇所を■で伏字にした。
- (7) 紙幅の関係上、原史料では改行が行われているものも、改行をせずに文を続けたものがある。
- (8) 省略箇所に適宜、「前略」「中略」「後略」を付した。使い分けは以下のとおりである。  
「前略」……一つの史料の中で、引用箇所より前の内容を省略したことを示す。  
「中略」……一つの史料の中で、ある項目と項目の間の内容を省略したことを示す。  
「後略」……一つの史料の中で、引用箇所より後の内容を省略したことを示す。

このほか、ある項目の途中で文章を省略した際には文中に〈略〉とした。ただし、日誌類の掲載していない日付については、省略記号を付さず略した。

(9) 原史料に付された「軍事機密」「極秘」等の押印やメモ書き等、資料の読解上関係のないものは、読みやすさのため省略した。

(10) 注釈など編集者のコメントを追加した際には「一内に記した。

(11) 原則として資料に付されている件名を資料タイトルとしたが、便宜上事務局が付した資料タイトルには\*をつけた。

10 引用した書籍、論文などは原則として脚注に次の順序で表記した。

(1) 書籍

著編者名 『書籍名』 出版社名 刊行年 頁

(2) 論文

著者名「論文名」(編著者名『収録書名』 出版社名 刊行年 頁)

11 人物名については敬称を略した。

12 人物の生年は原則として和暦で表記した。

13 本文中において固有名詞、専門用語、読み方が難しいと思われるものなどにはよみがなを振った。原則として平仮名で振り、方言音についてはカタカナで振った。ただし、引用文や資料などに関してはその限りではない。

14 地名・行政区名は原則として当時の地名を記載し、「旧○○」という表記はしていない。

15 本文中の年号は西暦で表記し、( )内に和暦を表記した。

例… 一九四五年(昭和二〇)

16 資料中に掲載されているものを除き、本文中や掲載証言の中では「部落」という表現を「集落」とあらためて表現した。



